

を射ることをukといふ、古事記宇遲和紀郎子の御歌に伊岐良牟登 許許呂波母閉拵、又伊岐良  
受會久流 阿豆佐由美麻由美ともあり、このukの對語がsk、夫木集のしきり羽である。  
更に云へばukは別にukともいひ、これは的を意味する、古事記孝元天皇の條葛城長江會  
都毘古の後、的臣とあり的をイクハとよます、イクハのは附尾音、夫木集のしきりはのはも亦  
附尾音で、それを幸に羽字を當てたのである、志之岐羽もskのシを疊みたる形に外ならな  
s。

問 答

(三三〇五) 物不念 道行去毛 青山乎 振放見者 菌花  
香未通女 櫻花 盛未通女 汝乎曾每 吾耳依云  
吾叫毛曾 汝丹依云 荒山毛 人師依者 余所留跡  
序云 汝心勤

(三三〇七) 然有社 歲乃八歲叫 鑽髮乃 吾同子叫過 橋  
末枝叫過而 此河能 下文長 汝情待

柿本朝臣人麿之集歌

(三三〇九) 物不念 路行去裳 青山乎 振酒見者 都追慈  
花爾太遙越賣 作樂花 佐可遙越賣 汝乎叙母  
吾爾依云 吾乎叙母 汝爾依云 汝者如何念哉 念  
社 歲八年乎 斬髮 與知子乎過 橋  
具利 此川之 下母長久 汝心待

同一歌の二傳である、人麿之集歌の方が原歌らしくおもはれる、前なる歌の末、荒山毛以下は  
後の附加らしく、これは無きがまさる。物不念 道行去毛 青山乎 振放見者、この四句は次に  
つゝじ、さくらをいはむ序、青山はなべて山をいふ、青に關せず、青壻になぞへて青山などいひ

はじめたであらう、振放は振分けの對形。サケはワケである。

菌花（枕詞）香未通女、櫻花（枕詞）盛未通女 これを受けて次に汝といふ。

汝乎曾毛、吾丹依云、吾川毛曾、汝舟依云 さういふ話だが汝はいかに念ふかと問ふ、

荒山毛 人師依者 余所留跡序云 荒山と雖人が依れば依添うといふ諺もある、これはこゝで

は詰らぬ説法のやうだ、末句汝心勤もいささかピントを外れてゐる。次は答

然有社 其事は遠の昔より聞きてゐたればこそ。

歳乃八歳乎 最近の八年間

鑽髮乃、吾同子叫過 鑽髮は頸著ともいふ、今のオカツバ、髪をお撫でにして襟の邊で切揃え

る、其髪の頃を吾同子といふ、七八歳頃の女の子、其頃を過ぎて。吾同子を略解、同子は何多

（肩）の誤かと云へるは誤、ヨチの語は後の竹取翁の歌にも見えるが、東歌にも（三四四〇）許

乃河泊爾 安佐菜安良布兒 奈禮毛安禮毛 余知乎曾母氏流 伊氏兒多婆里爾にも見えてゐる、

（この歌も契沖以下皆解を誤れり）橘 末枝乎過而 これは吾同子頃を過ぎ、橘の末枝を過ぎ、

身の丈けも伸びての意。

此河能、下文長、汝情待 この句をコノカハノシモノモナガクナガコロマツとよめるは當ら

ず、此河の裾びも（序）長く。今日まで汝の心の定まるを待ち居たり。

柿本人麿歌集の方も意は同じであるが、詞には少し異なるものがある。

都追慈花 爾太遙越賣 爾太遙はホニヅル、サニヅル等のニヅルの變化ニダルのルが融けてエ

よりエフに伸びた形、別にニヅラフとなる。宣長以下この變化を知らず、この變化には紅葉のモ

ミチ、モミヅル、モミタヒなど變化するを思合す可し。

櫻花 佐可遙越賣 佐可遙もサカエのサカエフと伸びたる形。

汝者加何念哉 汝はあど念ふや、汝はあど念ふなどよむ可し、アドはナドの原形。

與知子 こゝにヨチの語見ゆ、略解には斬髮與、知子乎過とし、與は之の誤、知子は加多の誤

と云ふ、取るに足らず。

(三三一四) 次嶺經 山背道乎 人都末乃 馬從行爾 己夫  
 之 步從行者 每見 哭耳之所泣 會許思爾 心之

痛之イタクシ 垂乳根乃タラチネ 母之形見跡ハハノカガミト 吾持有ワガモタル 眞十見鏡爾マラスミノカガミニ  
 蜻領巾アキツヒ 負並持而オヒナメモチテ 馬替吾背ウマカヘワガセ

次嶺經はskuk、ツギエフのエのネに通じたる形、umsmと記號關係の枕詞、枕詞にはかく記號關係より來れるもの少からず、されば記號を知らざる枕詞の説明は附會に了る。  
 山背道乎、人都末乃、馬從行爾、己夫之、步從行者、每見、哭耳之所泣、曾許思爾、心之痛之人づまは馬より行くのに己づまのみかちより行くを見る度泣かれて心痛しと也。  
 垂乳根乃、母之形見跡、吾持有 母の形見と吾持たる、吾が大切にするものなれどの意を包む。  
 眞十見鏡爾、蜻領巾、負並持而、形見の鏡と衣、蜻領巾は蜻羽の袖をいふにて衣の代語、これを鏡に添へる領巾と解せるは取らず、然らば負並持とはいふまじければ也。  
 馬替吾背 馬に代へよ吾が妻。

(LIIIIO) 隱來乃コモリク 長谷之川之ハツセノカハノ 上瀬爾カミツセニ 鶺鴒矣ウツヲ 八頭漬ヤツカツケ 下瀬之シモツセノ

瀬爾セニ 鶺鴒矣ウツヲ 八頭漬ヤツカツケ 上瀬之カミツセノ 年魚矣アネウツヲ 令咋クハシメ 下瀬之シモツセノ  
 鮎矣アユヲ 令咋クハシメ 麗妹爾クハシイモニ 鮎遠惜アユトホヨシミ 投左乃ナゲルサノ 遠離居而トヲザカリキテ 思オモフ  
 空ソラ 不安國ヤスカラナクニ 嘆空ナゲクソラ 不安國ヤスカラナクニ 衣社薄コロモコソ 其破者ソノヤレバ 繼乍ツキツツ  
 物モノ 又母相登言マタマアトイハ 玉社者タマコソハ 緒之絕薄ヲノタエガ 八十一里喚鷄ヤツツツ  
 又物逢登曰マタモノアヲトイハ 又毛不相物者マタモアハモノハ 戀爾志有來コヒニシアリケリ

隱來は籠月、つもごり、故にハツ(果)にかゝる。

長谷の川の上瀬に鶺鴒を八頭かづけ下瀬に鶺鴒を八頭かづけ、上瀬の鮎をくはしめ、下瀬の鮎をくはしめといひて、これを序に麗妹、くはし妹を呼起し、更に鮎の因にて、鮎遠惜、投左乃といひこれを序に遠離居而につゞく。鮎遠惜投左は彼我の距離の遠きを惜みつゝ鮎を投ぐるといふ也。  
 遠離居而、思空、不安國、嘆空不安國 これに一段となる。  
 衣社薄、其破者、繼乍物、又母相登言 衣は破れて脱棄てたるものも繼ぎては又も身に著け相ふといふに、  
 玉社者、緒之絶薄、八十一里喚鷄、又物逢登曰 玉は緒の絶えて放れくになるも又括り寄せ

て逢ふといふに、

又毛不相物者、戀爾志有來 又も相はぬ者は一どさかりし戀にしありけり。

(三三四四)

此月者 君將來跡 大舟乃 思憑而 何時可登  
 吾待居者 黃葉之 過行跡 玉梓乃 使之云者  
 螢成 髣髴聞而 大土乎 火穗跡 立而居而去  
 方毛不知 朝霧乃 思惑而 杖不足 八尺乃嘆  
 友記乎無見跡 何所鹿 君之將座跡 天雲之  
 之隨爾 所躡突乃 行文將死跡 道之不知者  
 獨居而 君爾戀爾 哭耳思所泣

黃葉之 過去跡 死去したるを云ふ、

螢成(枕詞)髣髴聞而 現ともなく聞く也。

大土乎、火穗跡 地團太を踏む也、此句諸本大土乎太穗跡に作る、元曆本大土乎火穗跡とせるは可なれど猶下に迹の一字を脱せり、(三二一九五)當土、足迹貫ともあり。

立而居而 立ちたり居りたり也。

朝霧乃、思惑而 上は枕詞、惑にかゝる、向く方も知らぬを惑といふ。

杖不足 杖は十尺一尋といへば 杖足すにて 八尺の枕詞となる、八尺之嘆は長歎也。

嘆友、記乎無見 嘆くも甲斐なき也。

何所鹿、君之將座跡 どこにか君のゐる氣がして

天雲乃(枕詞)行之隨爾 所躡突乃(枕詞)行文將死跡思友 行のまに／＼行き死せむと思へ

ども、道之不知者、獨居而、君爾戀爾、哭耳思所泣 行く可道も知らねば獨こもりゐて泣く外なしと也。

到三壹岐島一雪速宅滿忽過三鬼病一死去之時作歌

(三六九四) 和多都美能 可之故岐美知乎 世須家口母 奈  
 久奈夜美伎豆 伊麻太爾母 毛奈久由可牟登 由吉  
 能安末能 保都手乃宇良徹乎 可多夜伎而 由加武  
 士須流爾 伊米能其等 美知能蘇良治爾 和可禮須  
 流伎美 六鯖作

渡津海の波高く畏き路を安き心もなく惱みぬきて来て、

伊麻太爾母 今が今も、以下四句へだて、由加武士須流につづく。

毛奈久由可牟登(八九七)に事母無母無裳とあるもの、片方、これは音語、コモもなく、kもなく、mもなく、何事なく、それをコトもなくモなくとコの下にトを附くるは音便也、kとmは本来質音の相對音、名詞性の音である、物をモ、事をコトといふもkとmを幹とす、kとmの相交錯する交の訓をコモゴモといふ、mとkの對抗する音の意にmk、mkといひ、對等又相如を意味す、向をムクといふも、mとkの對向する音觀念を意味とせる也。事もなく母もなくは、

例之ば一も二もなく、是非なくなどいふが如し、一、二といふも其意にていふにあらず、是非といふも同じ、神功紀の歌に于摩比等破于摩警苦奴知 伊徒姑播茂伊徒姑奴池といへるも此類也、ウマヒトはumsm、イトコはukskにて、本づく所はumsmはumsmどち、ukskはukskどちといふにあるが、それをウマヒト、イトコといつたので、其意味はウマシヒトは美はし人、イトコはいとしひと(イトコを從兄弟と解するは不可)なれど、其意はこゝには用なし、甲は甲どち、乙は乙どちといふに同じ、宣長の母は喪、喪も其字のみの事にあらず、なべて凶惡事を母といふ也麻賀事の切りたる語也といへるは彼氏一流の附會、喪をモといふは特に喪に就て訓める語、麻賀事は亦別語にて其モとかゝはる語にあらず、喪のモにつきては(四二五四)附記參照、麻賀事はしか容易に説明し得られる語にあらざば、これは拙著古事記原義禍津日神の條參照、由岐能安末能 壹岐の海士、保都手の保にかゝる枕詞、保都手 布斗麻邇の布斗、これをホヅといひ、附尾音を加へてホヅテといへり、ツを濁るは音便也。

宇良徹は卜部、卜にて部は附尾音。

可多夜伎豆 東歌(三三七四)武藏野爾 宇良徹可多也伎 麻左氏爾毛 乃良奴伎美我名 宇

良爾低爾家里とも見え、眞牡鹿の肩骨を焼きてト合ふ我古代のト法、後は龜トといふものあり。

竹取翁歌

昔有二老翁一號曰竹取翁也、此翁季春之月登丘遠望、忽值三煮羹之九箇女子也、百嬌無情百花無匹、于時娘子等呼二老翁一嗤曰叔父乎吹此燭火也、於是翁曰唯々、漸移徐行著二接座上、良久、娘子等皆共含笑相推讓之曰、阿誰呼二此翁一哉、爾之竹取翁謝之曰、非慮之外偶逢三神仙一迷惑之心無三敢所三禁近押之罪希贖以三譔即作歌。

(三七九)

綠子之 若子蚊見庭 垂乳爲 母所懷 襜褕  
平生蚊見庭 結經方衣 水津裡丹縫服 頸著之 童  
子蚊見庭 結幡之 袂著衣 服我矣 丹固 子等何  
四千庭 三名之綿 蚊黑爲髮尾 信櫛持 於肩蚊寸  
垂取束 舉而裳纏見 解亂 童兒丹成見 紅丹

津蚊經色丹 名著來 紫之 大綾之衣 墨江之 遠  
里小野之 眞捺持 丹穗之爲衣丹 狛錦 紐丹縫著  
刺部重部 波累服 打十八爲 麻績兒等 蟻衣之  
寶之子等蚊 打拷之 經而織布 日暴之 朝手作  
尾 信巾裳成 者之寸丹取爲支 屋所經 稻寸丁女  
蚊 妻問迹 我丹所來爲 波方之 二綾裏沓 飛鳥  
飛鳥壯蚊 霜禁 縫爲黑沓 刺佩而 庭立往 道  
矣 去 禁尾迹 女蚊 髮髯聞而 水縹 絹帶尾 引帶  
成 韓帶丹取爲 海神之 殿蓋丹 飛翔 爲輕如來  
氷見 腰細丹 取飭氷 眞十鏡 取雙懸而 己蚊 杲還  
氷見 乍 春避而 野邊尾回者 面白見 我矣 思經蚊

送	古	方	所	忍	尾	蚊	狹
爲	部	子	爲	經	所	爲	野
車	之	等	故	等	來	迹	津
		舟	爲	水	者		鳥
持	賢	五	古	還	打	我	來
還	人	十	部	冰	冰	矣	鳴
來	藻	狹	狹	見	刺	思	翔
	後	邇	寸	乍	宮	經	經
	之	跡	爲	誰	尾	蚊	秋
	世	哉	我	子	見	天	避
	之	所	哉	其	名	雲	而
	堅	思	端	迹	刺	裳	山
	監	而	寸	哉	竹	行	邊
	將	在	八	所	之	田	尾
	爲	如	爲	思	舍	菜	往
	迹	是	爲	而	人	引	者
	老	所	今	在	壯	還	名
	人	爲	日	如	裳	立	津
	矣	故	八	是	路	路	

此歌の構造はなか／＼手ごんでゐる、それに字句の紛れもありてなか／＼よみ苦い、こゝには其字句を整理した所を書上げた。

先づ緑兒の若子時代、若子は最幼き頃をいふ、若子蚊見庭の見はm、kに代へた語である、若子の頃にはといふに同じ、垂乳爲は足乳根と同じく母の枕詞、爲、根はいづれも附尾音、母所懐

はハハニウダカエ、母に抱かれ、母のまなごで人手にも觸れず大切に育てられしをいふ。

襟襦はスキカクル、たすきを十文字にかける、平生は匍ふ兒、平生蚊見庭は匍兒の頃には、結經方衣はユフカタギヌ、袖無しのチャンチャンコ、これは小兒も大人も著る、山上憶良の貧窮問答では老夫子も著てゐる、其衣を氷津裡に縫ひ著、氷津裡は純の變化、小兒のチャンチャンコは大抵二種以上の布を織ぎはぎして縫ふものだが、これは一種の布で縫つたといふ、良家の兒に限ることなのだ。(氷津裡を表裏一種の布といふ説は首肯し難し)

頸著之童子蚊見庭、頸著は鬢髪ともいふ、オカツバで、頸のあたりで髪を切揃へるをいふ、其頃を童子(ワラハ)といふ、童子の頃には、結幡(枕詞)の袖つけ衣著し我を、この我をば言ひかけのことば、下に取まきてぐらゐを加へて解する、丹因はニヅラフ、丹因子等で娘の子、四千はヨチ、吾同子とも書く、其四千子らが吾を圍みて、四千庭をつくる、この庭は前の辭の庭ではない、三名之綿(黒の枕詞)かぐろき髪を信櫛(マグシ)もち、肩にかき垂れ(於肩蚊寸垂を諸本於是蚊寸垂とせるは誤)又取つかね、擧げて鬢形に纏きても見、又解きみだして童子髪になりても見、これは先づ髪を料として女の子共が吾の心を迎へむとかにかくする状を叙す。次は衣、紅(クレナキ)、諸本は羅に作る、紅の草書を羅の草書と見たのだ、これは次に紫之とあると並

ぶ語、紅の丹津蚊経、丹づくの伸び、丹色といふに同じ、丹津蚊経色に、赤い衣にといふに同じ、名著來（紫の枕詞）、紫の大綾の衣、それから墨江の遠里小野（ヲリヲノ）の眞榛もち、匂し、衣、これは黄色の衣、かく赤、紫、黄、色々の衣に、狛錦（枕詞）紐に縫著け、衣を紐著衣にして、刺割重部、サシヘカサネヘ、サシカサネといふに同じ、波累服、ナミカサネキ、これは衿のあたりの波形に打重るをいふこゝまでが衣。

打十八爲（枕詞）麻績兒等、蟻衣之（枕詞）寶之子等蚊、寶をタカラとよむは不可、ありきねのを枕詞とすればミヘ、古事記にも有衣の三重の子とある、寶は御瓮、前の衣を著る是等良家の女兒、なほ次の敷布につづく。

打栲之（枕詞）經て織る布、荒布をいふ、日暴之（枕詞）朝手作尾、麻手作の布を、（手作布、東歌に多摩川にさらす手作ともよめり）信巾裳成、座の下に敷く裳、裳形に縫つて敷いたのだ、其敷裳を者之寸丹、座敷の間、床の間、（今のサシキ、シャジキ、古事記八俣大蛇の條には佐受岐と見ゆ）に取敷き、この信巾裳成、者寸丹取爲すがよめなかつたか、末の爲寸を次の屋所經の上に運んでゐる、白文萬葉集にもさうなつてゐる、こゝで一ト切。

屋所經 稻寸丁女蚊 屋にふる、ふれる、ふるる、いづれともよむべし、屋の内に護られて外

に出ることを許されぬ稻置をとめ、これは又すつと良家のをとめなのであらう、かくて外出を許されぬをとめが妻問の物として吾に贈來せし、波形の二綾の裏沓（シタクツ）、その裏沓に、飛鳥の（枕詞）あすかをとこが、雨いみして縫へる黒沓（クリクツ）を著けて庭に立往く、こゝまでは沓を叙す。

道矣去（ミチヲユク）、諸本は退莫立に作る、全くの紛れだ、これは前段の家所經と並べた句だ、家に經る者とこれは道を去く者、道はゆくが禁尾迹女、母か乳母などに見守られてゆく少女、禁はモラレともイミノともよむべし、其少女は庭に立ちて音する吾方をほのかに聞きて、其下諸本一句竄入あり。

水縹（ミハナダ）の絹帶を、引帶成（ヒコビナス）ダラリンに垂るゝをいふ、韓帶に取なし、これは帶を叙す。

海神之（ワタツミ）殿蓋丹（ミアラカニ）飛翔る、爲輕如來（スガルナス）腰細に取飴り、眞十鏡を取雙め懸けたらむ如く双の目を見張りて、己が杲（カホ）をかへり見つゝゆく。

次は叙法を新にして、

春避りて野邊を行めぐれば、吾を面白み思へか、狹野鳥も吾に來鳴き翔りすぐ、





伊呂雅世流は大嘗の大御酒の悠紀主基の悠紀より来る、悠紀の大御酒は有色にして主基の大御酒は無色——白色となつてゐる、で主基はsk(透)skの語を發すると對して悠紀はuk、uk、uk等の語を發してゐる、即ちシロゲルと對するイロゲルとなる。

宇奈雅流はukskの分裂 uk、sk

(三八八〇)

所聞多禰乃机之島能小螺乎伊拾來而石  
 以都追伎破夫利早川爾洗濯辛鹽爾古胡登毛  
 美高杯爾盛机爾立而母爾奉都也目足兒乃負  
 父爾獻都也身女兒乃負

所聞多はカシマ(鷲、鹿島)、和名抄加之萬、能登也、禰はこゝは附尾音、嶺にあらず、その机の島の小螺をいひりひ來て、つゝきやふり(ハフリはヤブリの變化)早川にあらひ、辛鹽に

古胡(音)ともみ、高坏に盛り、机に仕立て、母にまつりや愛兒のまけ、父にまつりつや愛兒のまけ。

負を刀自の誤といふは當らず、ワケ(和氣、戲奴)のマケとなれる也、鬘をワゲ、マゲといふに同じ。マケは汝、地方語、己より目下の者にワレといふ、このワも汝である。

乞食者詠

(三八八六)

忍照八難波乃小江爾廬作難麻理且居葦  
 河爾乎王召跡何爲牟爾吾乎召良米夜明久  
 吾知事乎歌人跡和乎召良米夜笛吹跡和乎召  
 良米夜琴引跡和乎召良米夜彼毛令受牟等  
 今日今日跡飛鳥爾到雖立置勿爾到雖不策

都<sup>ツ</sup>久<sup>ク</sup>怒<sup>ヌ</sup>爾<sup>ニ</sup>到<sup>イダリ</sup>東<sup>ヒムガシノ</sup>中<sup>ナカノ</sup>門<sup>ミカド</sup>由<sup>ユ</sup>參<sup>マキ</sup>納<sup>リ</sup>來<sup>キ</sup>豆<sup>テ</sup>命<sup>ミコトク</sup>受<sup>ケ</sup>例<sup>レ</sup>婆<sup>バ</sup>馬<sup>ウマ</sup>  
 爾<sup>ニ</sup>己<sup>コ</sup>曾<sup>ソ</sup>布<sup>フ</sup>毛<sup>モ</sup>太<sup>タ</sup>志<sup>シ</sup>可<sup>カ</sup>久<sup>ク</sup>物<sup>モノ</sup>牛<sup>ウシ</sup>乎<sup>ニ</sup>己<sup>コ</sup>曾<sup>ソ</sup>鼻<sup>ハナ</sup>繩<sup>ヒナ</sup>波<sup>ハ</sup>久<sup>ク</sup>例<sup>レ</sup>  
 足<sup>アジ</sup>引<sup>ヒキ</sup>乃<sup>ノ</sup>此<sup>コノ</sup>片<sup>カタ</sup>山<sup>ヤマ</sup>乃<sup>ノ</sup>毛<sup>モ</sup>武<sup>ム</sup>爾<sup>ニ</sup>禮<sup>レ</sup>乎<sup>ヲ</sup>五<sup>イ</sup>百<sup>ヒャク</sup>枝<sup>エ</sup>波<sup>ハ</sup>伎<sup>キ</sup>垂<sup>タレ</sup>天<sup>テン</sup>  
 光<sup>テル</sup>夜<sup>ヤ</sup>日<sup>ヒ</sup>之<sup>ノ</sup>異<sup>ケ</sup>爾<sup>ニ</sup>于<sup>シ</sup>佐<sup>サ</sup>比<sup>ヒ</sup>豆<sup>ヅ</sup>留<sup>ル</sup>夜<sup>ヤ</sup>辛<sup>カラ</sup>碓<sup>ウス</sup>爾<sup>ニ</sup>春<sup>ツキ</sup>庭<sup>ニハ</sup>立<sup>タテ</sup>  
 碓<sup>ウス</sup>子<sup>シ</sup>爾<sup>ニ</sup>春<sup>ツキ</sup>忍<sup>オシ</sup>光<sup>テル</sup>八<sup>ハ</sup>難<sup>ナニ</sup>波<sup>ハ</sup>乃<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>江<sup>エ</sup>乃<sup>ノ</sup>始<sup>ハジ</sup>垂<sup>タレ</sup>乎<sup>ヲ</sup>辛<sup>カラ</sup>久<sup>ク</sup>垂<sup>タレ</sup>  
 來<sup>キ</sup>乎<sup>ヲ</sup>陶<sup>タウ</sup>人<sup>ヒト</sup>乃<sup>ノ</sup>所<sup>ゾク</sup>作<sup>レル</sup>瓶<sup>カンラ</sup>今<sup>イマ</sup>日<sup>ヒ</sup>往<sup>ユキテ</sup>明<sup>アス</sup>日<sup>ヒ</sup>取<sup>トリ</sup>持<sup>チ</sup>來<sup>キ</sup>吾<sup>ワガ</sup>目<sup>メ</sup>  
 良<sup>ラ</sup>爾<sup>ニ</sup>鹽<sup>シホ</sup>漆<sup>メリ</sup>給<sup>タビ</sup>時<sup>モテ</sup>賞<sup>ハヤサ</sup>毛<sup>モ</sup>時<sup>モテ</sup>賞<sup>ハヤサ</sup>毛<sup>モ</sup>明<sup>アス</sup>日<sup>ヒ</sup>取<sup>トリ</sup>持<sup>チ</sup>來<sup>キ</sup>吾<sup>ワガ</sup>目<sup>メ</sup>

忍照八 uk sk 今一の枕詞 uk sk 又 uk sk (葦散)、難波の枕詞、難波は um、  
 um、sm 兩相對記號中間の中性記號 n、nk と共に神都を意味す、別に mm の名あり、  
 枕詞は uk sk、すべて記號關係にてかゝる、難波の小江にいほづくり、  
 難麻理豆居 アツマリの分裂アマリ、ツマリ、アマリはナマリとなる、難麻理は是、集る也、  
 隱のナバリに比し隱るゝと解するは當らず、こゝの蟹は勇敢に大王の召に赴く、隱るゝが如き蟹

にあらず、集りて居る葦かにを大王召すといふ、何爲んに吾を召しますにや、明らかく吾が知れ  
 る事を(をは嘆詞)歌人と召すはづなく、笛吹と召す筈なく、琴引くと召す筈もなし、はて何に  
 召すますや、ともかくも命うけむと、今日今日と(枕詞)あすかに到り、たてども——起てども  
 (枕詞)置勿(起きな)に到り、杖かねども(枕詞)つくぬに到り、東の中の御門より参り來  
 り、命受くれば、いやよくしたものの、馬にはふもだし、牛には鼻繩と、では吾には何を? 足引  
 乃此片山の

毛武爾禮 爾禮は香蕈のーラと同語、草の蕈と木の蕈 木の蕈をもむにれといふ、もむの木の  
 皮を干し粉にして草のニラに代るなり  
 五百枝波伎垂 波伎はカキ、カルの原形 ハルともいふ、五百枝苜垂れ、天光夜(枕詞)日乃  
 異爾干、日乃異は日をヒケといふを碎きていへり、(ヒケともへギともいふ、日置)日に干し也、  
 佐比豆留夜(枕詞、カラにかゝる)辛砥に春き、庭に立つ(枕詞、um sm、um sm 麻 uk  
 sk 臼杵にかゝる)碓子につき、木の皮を粉にする也、其粉に難波の小江の始垂(塩の始垂)の  
 辛いところを取り來て、陶人の作れる瓶を今日往きて(枕詞)明日取持ち來、吾が目らに塩ぬり  
 たまひ、もてはやしますとなり、目出たし〜。

大伴宿禰池主和家持卿歌

(三九七三) 前半略 餘之奈加波 可受奈枳毛能會 奈具佐  
 牟流 己等母安良牟等 佐刀妣等能 安禮爾都具良  
 久夜麻備爾波 佐久良婆奈知利 可保等利能 麻  
 奈久之婆奈久 春野爾 須美禮乎都牟等 之路多倍  
 乃 蘇泥乎利可弊之 久禮奈爲能 安可毛須蘇妣伎  
 乎登賣良波 於毛比美太禮底 伎美麻都等 宇良  
 吳悲須奈里 己許呂具志 伊謝美奈由加奈 許等波  
 多奈由比

この歌は家持卿を野に誘ふ書面に擬したる歌、末尾の許等波多奈由比は書面の結末にいふ申入  
 れ候元可祝で止の定文句である、多奈は阿奈(加之古)の對語、事は元可祝結ひである、由比は  
 結末を意味す、(三二七九) 葦垣之 末搔別而 君越跡 人丹勿告 事者棚知こゝの事者棚知は

神に誓ふ意味で、事はあなかしこ知れ、神も照覽あれである、他には(五〇)に身もたな知らず、  
 (一七三九)に身はたな知らず、(一八〇七)には身をたな知りてなどある、これらでは多奈はた  
 じ助勢詞で、もとの阿奈の意味はなくなつてゐる、宣長は許等波多奈由比は事はたな知れの誤と  
 し、たな知れをかく心得よ、承知せよと解してゐるが、多奈を除いての辯であれば論にかゝらず。

向京路上依興預作侍宴應詔歌

(四二五四) 蜻島 山跡國乎 天雲爾 磐船浮 等母爾倍爾  
 眞可伊繁貫 伊許藝都追 國看之勢志氏 安母里  
 麻之 掃平 千代累 彌嗣繼爾 所知來流 天之  
 日嗣等 神奈我良 吾皇乃 天下 治賜者 物乃布  
 能 八十友之雄乎 撫賜 等登能倍賜 食國之 四

方ノ人乎母 安夫左波受 感賜者 從古昔 無利之  
 瑞多婢末彌久 申多麻比奴 手拱而 事無御代等  
 天地日月等登聞仁 萬世爾 記續牟曾 八隅知  
 之 吾大皇 秋花 之我色色爾 見賜 明米多麻比  
 酒見附 榮流今日之 安夜爾貴左

この長歌では特に安夫佐波受の語を考へる、この語舊本安天左波受到作る、宣長、安夫佐波受到て天は夫の誤と云へるは當れり、但アブサハズを放ラカサズ也といへるは意外也、(一五四七)にいへる相佐和 相狹丸、宣長の云へる物語のあふさふ、紀に凡海連の凡をよめるオフシ、オフサマ、其變化のアフサハズである、意は凡ならず、大方ならずといふに當る、問題は一應以上了る、宣長の放らかさずの辯には看過し難きものあり、左に附記す。

附記

安夫左波受は放ラカサズ也、波夫流は放棄遣る意の古言也、波と安と通じてハフル(溢)も同

じ、古事記下の卷、輕太子の伊余湯に流れ給はむとせし時の歌「意富岐美衰 斯麻爾波夫良婆」とあり、又續紀卅一、詔に「彌麻之大臣之家内子等乎母波夫理不賜失慈賜波牟」此集中十四に、「久爾波布利 彌爾多都久毛乎」など見ゆ、後の物語にも波夫良加須とも阿夫良加須とも多く見ゆ又死人を葬ると云も家より出しやりて野山に放らかす意にて言の本同じ、以上が宣長の波夫里の辯であるが、これも例の強辯にて、安夫左波受を放らかさずと強るさへあるに、放ると溢るを同言といひ、更に集中の久爾波布利、又死人を葬むるのハフリをも同言と爲すに至りては、其妄辯言語に絶す、言葉は音形同じきも語原は異なるを例とす、是等も其一例である、改めていふ、放るのハフはハクの變化、サクと對語、合せてはサバクといふ、溢はアフル變じてハフルともなるが、これはアマル(餘る)の變化である、記號を以ていへば放るはuk、ハカス、ukともなる、skと對語、溢るはum、ハフル、um、對語はsm、次に集中の國波布利のそれは放りでも溢れでもなく、打羽擧の羽擧、煽るに當る、語原はアガリ、サガリのアク、記號はuk、uk、で、放りと同記號だが、本づく觀念が異なる、これはアガリで調子の昂るをいふ、國波布利は國を煽つて羽振りよく、勢よくを意味する、最後に死人を葬るのハフリはkm、であるこれは甕のmk、kmより出發する語で、死人を甕に納める意味の語、mk、mk、mk、k

k m (殯)、k m、葬に關するあらゆる語がこゝから分岐してゐる、假葬をカリ m k といふより k m をも其假葬と解しカリとモを分ち、喪を單音でモといふに至つた、他には神主祝と書きて祝をハフリとよますものもある、これも葬と同記號で k m とよみたるものであるが、本づく観念はそれと異に、これは神の k m よりハフリとよみたるものである。葬のハフリを放りと強ひ、野外に放棄する意味するなどのいかに強辯とはいへ思切つた事をいつたものである、一言なかるべからざる所以である。

陳私懷一首并短歌 家持卿作

(四三六〇)

天皇之等保伎美與爾毛於之且流難波乃久  
 爾爾阿米能之多之良志賣之伎等伊麻能乎爾  
 多要受伊比都都可氣麻久母安夜爾可之古志可  
 武奈我良和其大王乃宇知奈妣久春初波夜知

久佐爾波奈佐伎爾保比夜麻美禮婆見能等母之  
 久可波美禮婆見乃佐夜氣久母能其等爾佐可  
 由流等伎登賣之多麻比安伎良米多麻比之伎麻  
 世者伎己之乎須四方乃久爾欲里多且麻都流  
 美都奇能船者保理江欲里美乎妣伎之都都安佐  
 奈藝爾可治比伎能保里由布之保爾佐乎佐之久  
 太理安治牟良能佐和伎伎保比且波麻爾伊泥且  
 海原兒禮婆之良奈美乃夜敵乎流我宇倍爾泥且  
 麻乎夫禰波良爾宇伎且於保美氣爾都加倍麻  
 都流等乎知許知爾伊疾里都利家理會伎太久毛  
 於藝呂奈伎可毛己伎婆久母由多氣伎可母許



る、これらは頤の字、字書に幽深難見也とあるより限り無きと見た結果であるが、私は漢字の事は能く知らないが、頤が幽深にして見難也といふ如き意味の語であるなら、オギロと訓したのはいかゞと思ふ、又契沖が、わたの底はいたりてふかき物とおもへど君の大みけにとて海士どものいざりし釣してよきさかななどもをたてまつるを見ればそこばく奥は無きかとなり、と云へるは家持卿の歌の意味を誤解してゐる、歌に曾伎太久毛於藝呂奈伎可毛、已伎婆久母由多氣伎可母と云へるは難波の都全體を讚へたので、海をいつたのではないのである。

新解語彙

ア

- 蜻島 シマ アキツ (二) 安禮衝 ツク アレ (五三) 在根良 ヨシ アリネ (六二) 葦若 生 アシ 末ナヘ (二二八) 青旗乃 アチ ハタ
- ノ (二四八) 安幡 ハ ア (二〇三) 天數 ヨミ アマ (二一九) 荒人神 トカミ アラヒ (一〇二〇) 相佐和 サフ アフ (一五
- 四七) 敢而 テ アヘ 阿倍寸管 ツツ アヘキ (二六七二) 秋津葉 ツバ アキ (三三〇四) 木防已 ツラ アチツ (三二八
- 八) 阿邪佐 サ アザ (三三九五)

イ

- 伊刀河 カハ イト (一五二四) 伊都我里 ガリ イツ (一七六二) 盧八療 イホヤ イホヤ (一八〇九) 日豆良賓 ラヒ イヒツ
- (三三〇〇) 伊呂雅世流 セル イロゲ (三八七二) 射布折 チリ イシキ (四二〇五)

ウ



宇波疑ウハギ (二二二) 宇既具都ウケツ (八〇〇) 表者奈佐我利ウハハナ (九〇四) 牛吐ウシ (一〇二〇) 裏儲而ウラマ (一二七八) 浮津ウヅキ (一五二九) 宇都呂ウツ (一五四八) 宇奈雅流ウナ (三八七五)

オ

於保登禮流オホト (三八五五) 忍照オシ (三八八六) 於藝呂奈伎オギロ (四三六〇)

カ

可利豆カリ (八八八) 可賀利カカ (九〇四) 玉響カツ (二二九九) 玉垣入カギ (二二九四) 霹カ (四四六〇) 打久津ウチヒ (三三九五) 加多波牟カタ (四〇八一) 可治都久米カヂツ

キ

伎須賣流キス (四二二) 霧立渡キリタチ (九二二) 薄去者キエテ (二六七四)

ク

草根乎結クサネ (二〇) 久禮久禮クレ (八八八) 國栖クニ (一九一九) 草取クサ (一九四三)

コ

籠毛コモ (一) 隱來乃長谷コモリク (三三三〇) 許等波多奈由比コトハタ (三九七三)

サ

左麻禰之サマ (八二) 刺並之國サスナミ (一〇一〇) 耳語ササ (一三五六) 三枝サキ (一八九五) 左太サ (二五七六)

シ

白縫シラ (二二六) 志夫フシ (二二〇五) 附目絨結シメ (一五四六) 安串呂シシク (一八〇九) 下心吉シタコホ (一八八五) 比米シメ (三三三九) 志之岐羽シシ (三三〇二) 四具比相シゲヒ (三八二二)

虚見津 ミツラ (一) 袖續 ツクデ (一五四五)

タ

疊有 タダナハル (三八) 多奈不知 タナシ (五〇) 且霧隱 タナギリ (五〇九) 迦多知 カダチ (七九四)

立阿射利 タチアザリ (九〇四) 立名付 タタナツク (九一三) 多鷄蘇香 タケソカ (一〇一五) 玉帝 タマハ

(三八三〇) 牘鼻 タブサキ (三八三九) 舉藏 タネ (三八四八)

ツ

嬌手 デツマ (五〇) 都久保利 ツクホリ (九〇四) 身疾 ミツク (一〇一〇) 次嶺經 ツギネ (三三二四) 認 ツク

都久米 ツクメ (四四六〇)

テ

手母須麻 テモスマ (一四六〇) 天良佐比 テラサヒ (四一三〇)

ト

取與呂布 トリヨロフ (二) 鞞 トモ (七六) 鳥總立 トブサ (三九一) 刀比佐氣斯良受 トヒサケ (七九

四)

ナ

奈加弭 ナカハズ (三) 魚津左比 サナヅサヒ (五〇九) 名積 ナム (一八二三) 猶預四手 ナカヨド (二六九〇)

小甘 ナカカラム (三八四六) 難麻理 ナマ (三八八六)

ニ

庭立 ニハニタチ (五二二) 爾布敷可 ニフシカ (九〇四) 爾太遙 ニダエフ (三三〇九)

又

貫簀 ヌキ (五五四)

ネ

練乃村戸 ネリノムラド (七七三)

ハ

薄太禮 ハダ (二四二〇) 波禰受 ハネ (二四八五) 放駒蕩去 ハナリゴマ (二六五二)

ヒ

一與 ヒト (二四五六) 引豆良比 ヒキツ (三三〇〇) 氷津裡 ヒツ (三七九一) 干稻千稻 ヒネ (三八四八)

フ

布久思 フク (二) 布都麻 フツ (四〇八一) 布佐倍 フサ (四一三一) 布美安多之 フミア (四二三五)

ホ

保杼久 ホド (七七二) 穂杼呂 ホド (二五三九) 富呂 ホ (四二三五) 保寶我之波 ホホガ (四三〇五)

マ

眞木佐苦 マキ (五〇) 嚮道 マカ (二二四) 麻保良 マホ (八〇〇) 松反 マツガ (一七八三) 卷向 マク (一八一三) 眞氣長 マケナ (二〇七三) 繆路 マカ (二四一一) 眞割持 マサキ (三三三三)

ミ

美籠母乳 ミコ (一) 美夫君志 ミフ (一) 見世追 ミセ (二二) 耳我嶺 ミミガ (二五) 御民 ミタ (九九六) 三禮 ミツ (一九六七) 水無河 ミナシ (二〇〇七)

メ

目豆見乃負 メヅコ (三八八〇)

モ

木丘開 モグ (一八五) 本名 モト (一八二六) 毛奈久事無 モナクコ (三六九四) 毛武爾禮 モム (三八八六)

ヤ

山跡 ヤマ (一) 安見知之 ヤスミ (三八) 八多籠 ヤマ (一九三) 燒刀之加度 ヤキタチ (九八九)  
八反 ヤ (二五六)

ユ

遊副川之川神 ユフカハノ (三八) 由久由久 ユク (一三〇) 木綿疊 ユフダ (三八〇)

ヨ

與杼六 ヨド 三一 與會埋無 ヨソリ (五一八)

ワ

和豆伎 ワヅ (五) 和期大王 ワキミ (九二三) 和和良葉 ワワ 一六一八 腋草 ワキ (三八四二)

ヲ

變水 ヲチ (六二七) 乎呼里 ヲチ (一〇二二) 越水 ヲチ (三三四五)

正誤表

頁	行	正	誤
一一	一〇	ウラサブル	ウラサツル
二五	一一	u <sup>ハ</sup> m <sup>マ</sup>	u <sup>ハ</sup> m <sup>ヨ</sup>
四一	一一	見えぬも	見えのも
四三	二	ネリ	ナリ
四六	七	かゝる	かる
四五	四	白氣結 <small>キリタチビケリ</small>	白氣結 <small>キリタチビケリ</small>
六三	八	s <sup>サ</sup> k <sup>キ</sup>	s <sup>サ</sup> k <sup>キ</sup>
六七	八	ことをいふ	ことをいふ
七八	七	歌は	歌に

頁	行	正	誤
一一二	六	多徹登	多登
一五七	一	s <sup>サ</sup> m <sup>ム</sup>	s <sup>サ</sup> m <sup>ム</sup>
一六〇	五	涙	游
一七八	七	當てありて	當てありと
一九四	一〇	吾が夫	吾が妻
一九八	一〇	物をモノ	物をモ
二〇一	七	霖禁	霜禁
二〇四	一二	者之寸	者寸
二一〇	九	n <sup>ナ</sup> m <sup>マリ</sup>	m <sup>ナ</sup> m <sup>マリ</sup>

昭和十七年十一月廿五日 初版印刷  
昭和十七年十二月十五日 初版發行

(二〇〇〇部)

萬葉雜歌考

定價 二圓

著 者

中<sup>ナカ</sup>村<sup>ムラ</sup>富<sup>トミ</sup>次<sup>ツ</sup>郎<sup>ロウ</sup>

發 行 者

東京市赤坂區榎坂町四  
山 崎 斌

印 刷 者

東京市麻布區斧町二八  
梅 谷 萬 造

認 承 協 文 出  
號 360178 ア

不 許  
複 製

發 行 所

東京市赤坂區  
榎坂町四番地

月 明 會 出 版 部

電話赤坂(四)三一四〇番  
振替東京一六〇九七七番  
會員番號一〇九〇二九番

配 給 元

東京市神田區  
淡路町二ノ九

日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

(東東 1273)  
所 刷 印 谷 梅

エト4A46

同じ著者によりて編述せる書目

元始日本語

元始日本語刊行會發行  
定價 參圓 郵稅二十錢

萬葉東歌新釋

同  
定價 壹圓貳拾錢 郵稅十五錢

萬葉東歌百首

草木屋出版部發行  
定價 壹圓五拾錢 郵稅四錢

萬葉百首選

月明會出版部發行  
定價 五拾錢 郵稅四錢

防人の歌

同

古事記原義上下

富士書房發行  
各定價 貳圓八拾錢 郵稅二十錢

古事記日本書紀の歌

月明會出版部發行  
定價 貳圓五拾錢 郵稅二十錢

購入は月明會出版部へ申込まるべし

終

